「あまみエフエム　ディ！ウェイヴ」放送原稿〈１２月２１日（金）放送分〉

テーマ「郷土の偉人」

あまみエフエム　ディ！ウェイヴをお聞きの皆様，おはようございます。鹿児島県立奄美図書館です。今週は，毎月第３週に，奄美にゆかりのある作家や偉人を紹介するシリーズ「郷土の偉人」の９回目です。

今朝は，太平洋戦争終戦後の奄美群島の武装解除，復員業務にあたった「高田 利 貞」陸軍少将を紹介します。

高田利貞は，明治２３年３月３０日，父利 英，母マスの長男として，鹿児島市平之町に生まれました。

鹿児島市で尋常小学校，高等小学校を卒業後上京し，海　城学校を経て陸軍士官学校に入り，大正２年１２月に卒業しました。そしてその月，陸軍少 尉として小倉の歩兵第４７連隊付，小倉商業学校配属将　校となり，軍人生活のスタートを切りました。

陸軍大佐として中国にいた昭和１３年には，黄河の堤防修復にも従事しました。

昭和１８年に少　　将に昇格した高田は，昭和１９年１２月に独立混 成 旅 団 長，奄美守備隊司令官として徳之島大和城　山に駐　屯し，翌年の昭和２０年８月１５日，同地で終戦を迎えました。

高田利貞少将は徳之島に駐　屯中，偽基地の設置など島民と一緒になって作戦実行に尽　力しましたが，高田少将の名を今に伝えているのは，戦後処理での活躍によります。

奄美守備隊は，もとは沖縄軍司令部の指揮下にありましたが，軍司令部玉　砕後は九州方面軍最高司令官の指揮下に入り，独立して奄美群島を守備することになっていましたので，終戦後はアメリカ第１０軍司令官を相手に降伏文書にもサインしなければならなくなりました。

沖縄での降伏文書への署名を終え，いよいよ９月２１日，アメリカ第１０軍のカンドン大佐が奄美守備隊の武装解除のために，命令文書を携え徳之島に来島しました。

その文書には，「北部琉球の兵器を渡せ」と指令してありました。それに対して，高田少将は，「ここは奄美群島であって，北部琉球ではない」として，それを了承しません。議論２時間半の末，ついに「北部琉球」を「奄美群島」と書き換えさせたのです。

これと同じようなことが，復員業務の中でも起こりました。昭和２０年１２月に加計呂麻島瀬相の海軍防備隊司令部で行われた復員完了の証明書への署名の場面がそれです。その時にも「北部琉球」となっていた証明書を「奄美群島」と改めさせたのです。

また，高田少将は終戦直後の９月３日には，沖縄のアメリカ第１０軍司令官ジョセフＷ・スチルウェル大将あてに，「希わくは奄美群島を第２のアルサス・ローレンたらしむる勿れ」という手紙を送っています。これは，「行政権を奪い，占領状態を長く続け，民心を失うようなことをしてはいけない」という忠告の言葉です。

奄美群島が日本国鹿児島県の大島地区として現在あるのは，高田少将の言う「猛烈で，しかも合理的な復帰運動」があったからですが，終戦直後の高田少将の働きも忘れてはなりません。

高田利貞は，昭和３１年に出版した『運命の島々・奄美と沖縄』という著書の中で，次のようなことを書いています。

> 日本は今度の戦に負けた。が，しかし日本は偉い国だ，尊い国だという信念を消すことはできなかった。
> どんなに偉い国，尊い国であっても国民が間違った道を歩いたら戦も負ける。
> 日本民族は元来優れた民族だ，過ちを過ちと悟り，一歩前進して過ちの道から踏み出し，元来の優秀性を発揮しなければならぬ。直ちに一歩前進しなければならぬ，と思った。
> 明治天皇御製集を，南洲全集をひもときながら，天皇に，国民に，祖先にお詫びをし，再興を誓うのであった。
> 今度の戦は，米国を中堅とする列国が勝ったと思ったが，よく考えてみると，日本民族が負ける道を歩いたのであった。
> 日本は日本らしく，世界平和を念願しつつ，世界の諸国の一つであることを忘れず，諸国と手を握って，人類永遠の平和のため日本の尊い個性を発揮すべきであると思った。歴史上の国の興亡を，日本戦国時代の武家の一家一家の興亡を思いかえしながら。日本民族の運命は今日以後の日本人の双肩にかかっている。いざ起とう，日本の興隆をめざして，と決意した。

来年は，「奄美群島日本復帰６０周年」の年です。

１２月２５日の復帰の日には，奄美図書館において，「奄美群島日本復帰記念講演会」を開催します。今回は「奄美群島日本復帰６０周年に向けて」と題して，楠田豊春，崎田実芳，大津幸夫の３氏に「この節目の年に何を学び，後世に伝えていくか」提言をいただくシンポジウム形式での会を計画しております。

１２月２５日（火曜日）午後２時から，県立奄美図書館４階研修室で行います。当日参加もできますので，ぜひご参加ください。そして一緒に考えましょう。

以上鹿児島県立奄美図書館でした。